
緋弾のアリア～D家の最強の負完全

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア～D家の最強の負完全

【NZコード】

N6817Z

【作者名】

carzoo

【あらすじ】

特別な力を持つ少年は、D家では、欠陥品として扱われ、負完全となつた。

最強である少年は、今日も、Dと言つ文字を背負いながら世界を駆け巡る

Protozoa cares さうぞうこころロローグ（前書き）

まいしくお願ひします。

Proto-gnue caries さうでもここにプロローグ

空からりや、女子が降つてくると思つか？

俺、大崎嶺は、そんなのを思つてゐる奴は、漫画、もじへせりノベの
読みすぎだと思ひぜ？注意しろよ？

四月、それは出会いの季節、春であり、始まりを告げる季節でもある

俺は新学期の朝に居候の部屋で日を覚ました。まあ、俺の部屋は他の奴が全員いなくて俺一人しかいねえからこいつの部屋にいんだけどな。

そしてこの部屋の主、遠山キンジが寝ているほうを見る。

あいつかわらずフラグ建築士のクソ野郎だが、一応親友なのでほつつておこつとでも思つたのだが、

ピン、ローン

つと囁つ囁ましいチャイムが鳴つて、その考えは、闇に消えた。

刹那、俺は、寝てゐるキンジに向て“ある力”を使ってキンジに空氣を圧縮した弾を腹に食らわせる。

「ひほおおお

つと囁つ囁き声を上げて、キンジが起きる。

「何しやがる！領！朝から滅茶苦茶な起こしかたしやがって！」

「つるさこぞキンジ白雪あたりが来てるだらうからつとつとといナ

「ああ？分かつた。行つて来る。」

そう言つて、キンジは寝具のままドアのまづたまづ歩いていく。

キンジの「ゲッ」つと囁つ声が聞こえた。ならば白雪なのだらう

「ふあ~~~~~、今日もこいつらがんばるかー。」

つで、白雪が部屋にあがつて来て、“キンジ”の為に作ってきて俺にも“少し”分けてくれる白雪お手製の弁当を食べる。

キンジが横で、白雪が三つ指つてお礼を言つてゐるとともに見えてしまつた下着で興奮してゐるのを横目に俺は、ちよびつとしない自分の分を食べる。あ~つめ

つで、バカみたいに世間話で盛り上がつてゐる一人をほつと見て、俺は防弾制服に袖を通して、自分の武器を手に取る。

わあ、こりで不思議に酔つた奴はいるか？そいつは正解。そのほか

は病院行きだ。

分からなかつた奴のために一応答えと解説だ。

A、防弾制服に武器なんて“普通”的学校にあるわけがねえ。これが分からなかつたら本氣でやばいぞ

解説

俺たちは“武偵”つと書つてチ狂つたものを育成する学校に通つている。

で、武偵とは、近年凶悪化しつつある犯罪に対応するために作られた国際資格で、武偵免許を持つものは武装が許可され逮捕権を有するなど、警察に準ずる活動ができる。ただし、武偵は警察とは違い金で動く。要するに武力を行使する探偵、便利な何でも屋なのだ。で、さらに説明すると俺が通つているのは“東京武偵校”東京湾に浮かぶ人工の巨大な浮島の上に作られた、学園だ。
キンジも俺もこの学校にはうそざりしております、転校しようと考えている

俺たちは、白雪を先に行かせてメールをチェックしていたが、キンジが不意に時計を見ると、8：55分だった。

「あ、やべえ！嶺！58分のバスに乗り遅れた！」
「あ～マジだチャリでいくか。」

「まあそうだな

そうじって、俺とキンジは、部屋を出る。

この後、始まる終わりのカウントダウンに俺とキンジは気がついていなかった。

そして、俺とキンジは一年どうか生涯、いや、来世まで、このバスに乗り遅れたことを後悔する事になる。

漫画やラノベぐらいしか起じないとのない空から女子が降ってくる
といつ死亡フラグが建つこととなるのだから

Women come falling from the sky. It is the introduction of the collapse determined by God. However, its decay does not allow non-standard. (空から女子が降つてくる。それは神が決めた崩壊の序章である。だが、規格外はその崩壊を許さない。)

これは、元のお話とどこかが違う物語

これからも頑張りつと思います。
応援していただければ光栄です。

The story began 物語は始まつた（前書き）

今回滅茶苦茶かも

The story began 物語は始まつた

何でこいつはなつた。答えは、キンジのフラグ体质のせいだな

「そのチャリニハ爆弾が仕掛けでやがります。
チャリを降りやがつたり減速させやがると爆発しやがります。」

おーおいおい、どーぞのボーカロイド様が、人を脅してんじやねえ
よー

「嶺ーお前この程度なら何とかなんだろやつてくれよー。」

「つむせえばかキンジー！俺でも全力でチャリこぎながらチカラなん

か使えるか馬鹿！

俺たちは一人でいがみ合いながら、全力で、チャリをいじぐ。

「9月27日で、並んで一合、やつべえなあびつあるキンジ。」

「お前がどっちも引き付けて困になれ」

「ふざけたことこってんじやねえ、ナイフ投げるぞ？」

「田の色が変わった時点で勘弁していただきたいってかお前やつぱり何とかできるんじやあ・・・え？」

キンジが上を向いて素つ頓狂な声を上げる。俺もそこを見てみると、

——さあ、みんな喜べ死亡フラグだ。空からおいやの子が降つてきやがつた。

「なんだあ？自殺志願者か？」

俺の期待とは裏腹に、その女の子は、パラシューートを開いて一いつ向に向かってくる。

「バカー！」の自転車には爆弾がついてんだくるんじやねえ

「いいんじゅねえ？どうせ自殺志願者だろ？」

「違つたらどうすんだよー！」

一人でそんなやり取りをしていたらいきなり、

「そこのバカ一人！さつと頭を下げなさいー。」

そういうと、一丁拳銃で、UNIを撃つ。かなりの腕前である」と

は確かだ。

「嶺！第一「グラウンドに逃げるぞ！」

「了解。そこまで言つたら助けてやるよ。」

「お前やつぱり何とかなつたんじやなえか！」

ん？後ろからやけに風がくるなあ？そつ御つて振り返ると、

「何でいんだよ……」

キンジも送れて気がつき、

「わつきも言つたらー。」の自転車には――――――

「バカ！」

『武徳憲章一条、仲間を信じ仲間を助けよ』行くわよー。」

多分、逆さになつて助けるつもつなんだり。キンジだけでも助けてもらうか

「おこーちびー俺はいいからそいつだけ助けな
「ちびじゃないー！まあいいわ分かつた。」

そういうと、キンジを逆さづりのまま助けて、爆発して、体育館の方に吹つ飛んでいった。

「さて、俺も何とかしますか。」

そつこつと、俺は、急にこぐべのをやめる。当然、自転車は爆発すると思つた奴、ここから、そんな考えしてるとおいてかれど、主に俺、

「大嘘憑き（オールフィクション）」

まあ、自転車は爆発しなかった。当たり前だろ？。

今、俺は、自転車の爆発を“なかつた”ことにしたのだから。

「残念だつたな。

俺の能力その？

全ての起こつた現実をなかつたことにする能力

大嘘憑き（オールフィクション）。

そこまで言つと、木の陰などから20台のCNCのせたセグウェイ
が、出てきた。

「暴れさせてもらおうかな？」

そういうて、俺はホルスターから、愛銃のFNハイパワーと、デザ
ートイーグル50AEを持つ。

「まずは、2台！」

銃口に向けて放たれた俺の弾丸は綺麗に吸い込まれ、2台を破壊す
る。

そこで、CNCが、一斉に俺めがけて撃つてくる。狙いは、頭部、
腹部、両手両足。

どれも俺が“普通”なら当たっているだらう。しかし俺は、その銃弾全てを、3倍の速度で跳ね返す。

今度は10台が破壊された。

「俺の能力その？」

全てのベクトルを操作する力。

一方通行さあ、締めだ！」

俺は、武器をナイフに変えて、セグウェイに突っ込んでいく。残り8台に無謀だと思われるかもしれないが、それは違う。何せ俺は、“呪われた眼”を持っているのだから。

「お前達は殺される。他の誰にでもないこの俺に、見えてるもののが違つ」の俺に！」

8台全てにナイフを投げ、なぜか、全てのマシンが壊れる。

「俺の能力その？」

全てのものに線と六が見えて、それを狙うとどんなものでも殺せる眼

直死の魔眼

最後に、全ての残骸を眺めながら一言。

「お前達は、常識の通用しない俺に挑んだから殺されたんだ、だか
ら、『俺は悪くない』」

そういえばキンジビうなつたかな つと、俺はスキップで、体育館に歩を進めた。

おーおーおー、本日一度目の驚きだぞ。何であいつがHUSAなんだ？しかもさつきのちびになんか弁解してるし、

「おーキンジ、お前ロリコンだったのか？」

「ああ頷。いやあ、この子が強制わいせつだなんだ言つてへくるから誤解を解こうと思つてね」

「その状態のお前は非常に陥じてい。ぜつてえそいつ中学生だい」「いや、多分小学生だよす」こいなあと思つてね

なぜかちびがフルフルしている。

「こんな奴ら助けるんじやなかつた。あんたたち

あたしは高2だ！！！！！！」

そういうと、打つてきた。

「分かつてゐる…おつや！」

弾切れになつたところをキンジが狙うが徒手格闘もやたらと上手い。

「待ちなさい！あたしは一度も逃げた犯人を見逃したことはない！」

つと、銃を撃つとするがキンジがマガジンを盗んでいる為使えないと、

「 もつ許さない、 ないて誤つても許すもんか！」

今度は日本刀一本で切りかかつて きた。

「嶺、お前の得意分野だろ！」

「任せろキンジ、刀で俺に勝てると思うなよ？ちびー。」

俺も日本刀を抜いて、一本で相対する。少し隙が見えたところで、ちびの刀を上に上げる。

武器のなくなつたちびは、その場に座り込んだ。

「逃げるぞ嶺！」

「当たり前だキンジ！」

一人で校舎に逃走する。

「次あつたら風穴開けてやる

「もう一度とあいたくねえよ！」

！！」

これが俺たちと、後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、
神崎・H・アリアとの出会いだった。

All well-appointed stage. Let's start with the weakest story
(全ての舞台は整った。さあ、最弱の物語を始めよう)

The story began 物語は始まつた（後書き）

あゝ滅茶苦茶だな
よし、次頑張るつー（作者はひたなにポジティブではあつません）

「やつベエクオリティめうたは落ちてゐる。」
「早く進めようとするからだ」
作

Condemned slavery, murderer of
Darkness

教務課に報告を済ませた俺たちは、とりあえず教室に入つていった。
そこで待つていたのは、

「いっよ～うキンジ、嶺、今年も車輌科の武藤剛氣さまが一緒に
ラスだぜ～い」

「つるせえよバカ。おりやねみいんだ。寝るぞ。」

そして俺は、睡眠を開始する。

え？起こされないのかつて？起こした奴は全員病院送りにしてきた
から大丈夫さ！

さて、俺は寝ていたのだが、なぜか急に外が騒がしくなってきた。うるさくて眠れない。ちょっと会話に耳を傾けてみるか。

「理子分かつちやつた！これはフラグがばっきばきに……」

理子の馬鹿な推理が炸裂している為、キンジがらみなのだろう。また寝とくか。そこで俺が寝ようとしたそのとき…

ズッガガーン

つと、発砲音がした。しかも音からしてこちらに向かってきている。それに加えて、

「風穴開けるわよー！」

つと声がする。ああ、あのちびか。犯人を特定した俺は、拳銃の弾を人差し指と中指で摘む。そして、ゆっくりと起き上がり、

「おい…………誰だ発砲しやがったのは…………死ぬとこだつたろうが…………

しかも俺の睡眠を邪魔しやがって、殺してやるドコノドイツダ？」

俺の直線状にはアリアの姿。こいつは完全に黒だな。俺は、アリアに向かって、愛銃を構える。アリアは、まったく空氣を読まずにこ

の発言。

「あなたは…ちゅうじよかった。あなたもあたしの隣に座りなさい。」

そのとき、俺の何かがブチギレタ。

「落ち着け領！今やつたつてなんにもないだろ？お前も強襲科なんだからそん時の実技で相手すればいいだろ？」
「オイキンジ。邪魔するんならお前から四肢をもぎ取ってじっくり殺していくぞ？」

この後、先生に止められて、俺は、自分の席に戻った。アリア絶対殺す。

昼休み。俺とキンジは、アリアから逃げる為に屋上に来ていた。

「なあキンジ、お前面倒だからあいつと一緒にいる。
「嫌だよ俺だつて」

話していると、強襲科の女子共が喋りながらやつてきた。
俺たちはこっそりと物陰に隠れた。

「さつき教務科から出てた周知メールさ、一年生の男子一人が自転車を爆破されたつてやつ。あれ、キンジと嶺じゃない？」

「あ。あたしもそれ思った。一人とも始業式にいなかつたし。」

「うわつ。今日の一人つてば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

俺はチャリ爆破されてねえよ。

「さつきのキンジ、ちょっとカワイイソーダつたねー」

「しかもアリア、一人のこと探つてたみたいだよ。」

「あー。あたしも聞かれたよ。キンジと嶺つてどんな武僧なのとか、実績とか。キンジのことは『昔は強襲科ですがかつたんだけねー』って答えたし、嶺のことは『強襲科では、現最強らしきよー』て両方とも適当に答えといたけど」

「アリア、さつき教務科の前にいたよ。きっと一人の資料あさつてるんだろうねー」

「おいおいおいおい、俺の奴は適当じゃねえー！」

「キンジも嶺もカワイイソー。女嫌いなのに、よりによつてアリアだ

もんねー。アリアってさー、ヨーロッパ育ちかなんだか知らないけどさー、空氣読めないよねー

「でもでも、アリアって男子の間じゃ人氣あるみたいだよ?」

「あーそうそう。三学期に転校してきてすぐファンクラブとかできただって。」

「ううう、写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されるんだって」

「それ知ってる。フイギュアスケートとかチアリー・ティングの授業とかのポラ写真なんて万単位なんだってさ。」

大丈夫なのかよこの授業にその額、頭イカレテンジヤねえか?

「つてうかアリアってさ、トモダチ居ないよね。ショッちゅう休んでるし」

「お皿も一人で食べてたよ。教室の隅っこでぼつーんって」「うわ、なんかキモ!」

俺とキンジは、同時にため息を漏らした。

どう考へても奴は普通じゃねえ!

時は移り放課後。

俺たちはダッシュで逃げ出していた。

「キンジ。あいつ面倒だから殺していいか？」

「やめてくれ。元殺人鬼でも今は武偵だろ？」

۱۵۰-۱

俺たちはキンジの部屋で、とりあえず雑談していた。すると、

つと、非常に迷惑な音が聞こえてきた。

「...エリザベス...」
「...エリザベス...」
「...エリザベス...」

と、愚痴愚痴いいながらも、とりあえずアヘと呟いていく。そこで待っていたのは、

「遅い！あたしがチャイムを鳴らしたら5秒以内に出る！」と一
か、神崎！？」

神崎・H・アリアだつた。俺は面倒なことが起つると思い、二人共、ドロップキックで、外に出し、ドアを閉める。

「おい嶺！何で俺まで締め出されるんだよ！」

「そりよ！さつさと中に入れなさい！」

「嫌に決まつてんだろうが！どう考へても面倒だ！キンジ、入れてほしにならひれるが、ソイツ任せるぞ？」

キンジにとってそれは死の宣告だった。まあ、キンジが許してくれなどとわめいているが、無視して、

部屋から出る俺、キンジが泣きそうな顔で、

「嶺、頼む残つてくれ。」いつを一人で面倒見るのは絶対に嫌だ！」

「知らん。俺は自分の部屋に帰るぞ」

「待ちなさい嶺。話があるからあんたも中にこなさい！」

強引に残された俺は、とりあえずリビングまで歩いていく。ナレアからいわれたのは死の宣告だった。

「キンジ、嶺あんたたちあたしのドレイになりなさいー。」

「嫌だ」

「右に同じく」

即答で俺は答え、キンジが激しく同意する。

「何でよー。」

「俺は自分よりも弱い奴の下にはつかねえ

「俺は単純に嫌だ」

「あたしがあんたより弱いですって？」

「何なら勝負してやつてもいい」

「いいわよ。あたしが勝つたらあんたはあたしの奴隸ね

「いいだろ。ンじゃキンジ後は任せた。」

俺はキンジをおこて、一皿散に逃げ出した。

「まで嶺…………」

俺の戦姉妹の赤崎未来は、いつもやつて、俺のいない時等に、地味に、

「未来か。 ありがてえな」

久々に帰った部屋は、きちんと清掃されていて、一週間帰つてこなかつた部屋だとは思えない。

とこひひ変わって俺の部屋。

掃除などをしてくれている。

まあ、俺は、自らのパソコンをチェックする。

そこには、たくさんのが入っていて、今回は、その中で一番報酬のいい依頼を選択する。

依頼内容は、

『マフィアの壊滅』

東京に現れたイタリアンマフィアを壊滅してほしいという国連からの依頼だった。その依頼書にチェックをすると、他の依頼が消えて、その説明文章にはいる。

「今日は、敵が約53人。アジトの設計は、…」

今回も楽な依頼だと判断した為、もって行く武器に、俺の最強の武器は持ってきてない。

「さて、ちょっと人でも殺してきますか。」

東京の裏路地そこには、男達の遺体が積み重なり、一人の少年を十数人で囲んでいた。

「クソガキ。てめえ俺たちの仲間を殺しやがって、」

「うるせえよおっさん。迅速に死亡しろ。」

そういうつて俺は、一方通行を使って、男に近づき、直視の魔眼で見えている穴にナイフを突き刺す。

「もういい加減分かっただらつ。お前」ときじやあ、俺は倒せねえ。

」

俺は、全員にいっせいにナイフを通常の10倍の速さで投げ、全員殺した。

「東京武徳高校2年、D家の末裔、大崎嶺でした。拍手！」

Weakest, in order to protect the peaceful ones who are dabbling in evil (最弱は、平和なもののたちを守る為に、悪に手を染めている)

Condemned slavery, murder of
Darkness

次こそクオリティを上げなければ

B a t t l e o f t h e a r i a

vsアリア（前書き）

旅行に着てクオリティ落ちました。

暗殺から帰つて、今俺は学校サボつて部屋で『jugar』している。すると、ケータイにメールが来た。

「『件名・勝負！』

内容・アンタがあたしより強いか試してあげる。明日強襲科の実戦で勝負しなさい！負けたらアンタもあたしの奴隸！…』

まあ、見るからに面倒なことなのだが、流石に、キンジのよつこ、元より奴隸にはなりたくないので承諾の返事を返す。すると、今度は別の奴からメールが来た。

「『件名：赤崎です。

内容：明日、アリア先輩と勝負ですよね？武器の調整しておきましょつか？』」

前にちよろつといったと思うが、こいつの名前は赤崎未来。俺の戦姉妹であり、武器の調整を任せられる数少ない一人だ。俺は、

「『件名：サンキュー

内容：ああ、ちょっと、本気でいくから調整頼む』」

つと、送ると、十数分で、未来が来た。

「嶺先輩。武器を預かりにきました。」

「ああ、これよろしく頼む。」

そういうて、俺は、自らの愛銃である、FNハイパワーと、デザトイーグル50AEを渡す。未来は、あれ？つとした顔になつて、

「先輩、『闇光陰陽刀』は使わないんですか？」

「あれは、下手したら相手を殺しちまつからな。安物の日本刀で十分だ。」

「そうですか……でも、それだと負ける可能性もあるんじやない

「ですか？」

「あのな、俺がそう簡単にアリアに負けるとでも思つか？」

俺が、そう聞くと、未来は、ブンブン首を振りて、

「絶対ありえません！領先輩は世界最強です！！！」

「世界最強は無理かも知れんが、お前の整備した武器で戦うんなら
ぜってえ勝てる。」

「任せてくださいー。」

そういふと、未来は、自分の部屋へ大急ぎで戻っていった。

そして次の日、アリアとの勝負の日でもあるこの日、強襲科は、大いに盛り上がりっていた。

「嶺～やつちまえ～～」
「アリア～かてえええ～！～！」

まあ、嶺～アリアの戦いが気になつてゐるだけなのだが、

「よく逃げ出さずに来たわね」
「その自信満々な顔が絶望に変わるとこりを拝んでやるよ。未来！武器よこせ！」

未来が整備された俺の武器を投げる。

「さあ、始めようぜアリア。先行はお前でいい。
「その余裕が命取りになる」と教えてあげるわ！」

アリアが、お得意のガバメントで、俺を狙つて来る。俺は特にあわてずに、弾を飛んでよける。そしてそのまま「ザートイーグルで、残りの弾を、つき返す。まあ、面倒の“銃弾返し”つてことだらうな。

アリアも、かわしながら、また、二丁拳銃でがんがん狙つてくる。俺も、FNハイパワーを抜いて、激しい銃撃戦を開始する。まあ、

装弾数は俺のほうが圧倒的に多いので、余裕で、全部落として、アリアに向かっていくが、紙一重でよけられる。

「何なのよアシタ！ わざから、全部落としては狙ってきてドンだけ命中率高いのよ！」

「そんなこと喋ってる内にやられるぜ？」

そういうって俺は、ワイヤー付のナイフを、その辺に狙わずに、適当に投げる。するとどうだろ。アリアの周りは、ワイヤーだらけになつて、うかつに動くことのできない。そこをすかさず、俺は一二拳銃で狙撃する。アリアも負けじと、どんどん狙ってくるが、やはり、俺のほうが、装弾数が多い為、簡単にアリアのところへ飛んでいく。アリアは、日本刀をだして、ワイヤーを切りながら、こちらに向かってくる。俺は、にたりと笑つて、

「剣で勝負するなんてお前もバカだな。もう俺の勝ち決定だ。」

「まだ分かんないでしょ？」

そういうて、アリアは、一刀の日本刀を巧みに使って、攻めてくる。だが、俺は、それを軽く受け流し、

「俺の本気を見せてやるよアリア。陰陽道第一の型“光影”」

真正面から俺は全力でアリアにかけていく。アリアは防御の体制をとるが、それは間違いだ。俺は、そのまま反転して、アリアの後ろに回りこみ、首元に刀を置く。アリアは硬直し、周りも静まり返っている。

「俺の勝ちでいいか？ アリア。」

「っく！ ええ、あたしの負けよ。」

『仕事の依頼だけなりませうてやる。や此時は俺を頼れ
』
『……』

「仕事の依頼だけなりませうてやる。や此時は俺を頼れ
ていいだ。
強襲科の阿呆が騒いでいるのを、横田は、俺は、自分の部屋に帰つ

He defeated the hero, the story
of their own progress (主人公を倒し
た彼は、自らの物語を進む)

光影にルビを振りました。

皆さんに質問です！（いつでも受け付けます。）

好きな曲（アニメでもドラマでも普通に、アーティストの曲でも大

丈夫！）を教えてください！

今年最後の投稿です！間に合ってよかったです！

Failure
of
frustration 失敗悔しさ

俺は未来に武器を調整してもらつてから自分の部屋から出て行つたので、バスに乗れず、一人で、雨をベクトル操作ではじきながら歩いていた。通行人から変な目で見られるが放つておこう。歩いていると、ケータイが、俺の好きなバンドの曲を流し始めた。見るとアリアからだつた。

「もしもし、何アリア」
『アンタ今どこ……』
「今学校に向かう途中」
『ちょうどいいわ。そこでこの装備に武装して女子寮屋上に来なさい』
「俺はお前の奴隸ごつこの一員にはなつてないはずなんだが」
『事件よ！手伝つて！』
「ん？ああ分かつた。すぐ行く」

そこで電話を切る。俺は通行人から見れば、今から人を殺す殺人鬼

の顔になっていたと思う

そこから、ベクトル操作で、脚力を異常なほど高くして、女子寮屋上にまで駆ける。俺は、約3分で女子寮の屋上についた。屋上を見渡すと、アリアと俺外には階段のひさしの下に狙撃科のレキが体育座りで座つてゐる。

レキ スナイper 狙撃科で入試から今までUランクの天才少女。腕は確かに、キリングレンジ 確か絶対半径は2051メートルだつたつて?俺の依頼を手伝つてもらうことがよくある。裏も含めてはただ一人だ。つで、無愛想無表情だから口ボツトレキなんて呼ばれてる結構デカイヘッドフォンを付けていて、風の音を聞いているらしい。俺は、コツコツとヘッドフォンをノックする。するとレキはこちらを向いて

「嶺さん、来てましたか。」

まあ、さつき無愛想無表情なんていつたが俺がいると、表情豊かになる変わった奴だ。今は一コツとしている。

「ああ、さつき呼ばれてな。」

「ご苦労様です。」

「おメエもな」

二人でしゃべつてみると、アリアが俺に気づいたようだ

「ちょっとー嶺!なんでU装備でできないのよバカ!」

「俺はどんな装備でも怪我しねえからいいだろ」

「はあ、こぞというときは守れないわよ」

「別に守つてもうおうなんぞ思つちゃいねえよ」

また、レキと話しているとキンジが来た。U装備で

「時間切れね」

アリアが俺らの方を向く。まあ、どうせ俺が乗るはずだつたバスがあの口リ制服の金髪にジャックされたんだろうが

「もう一人くらいランクがほしかつたけど、出払つてゐみたい」「事件つてなんなんだよ」

キンジが不機嫌そうな顔で聞くと、

「バスジャックよ」「やつぱりそňか、どうせ通学バスだろ?」「そňよ。なんでわかつたのよ」「さあ?自分で調べれば?」「お前つてすげえよな」「武僧殺しと同じやり方みたい。とにかく行くわよー。」

俺たちは説明を受けた。レキはヘリ追跡、俺とキンジは車内、アリアは車体の調査だ。あとはインカムで話すそつだ。

「とにかく行こうぜ。あ、パラシユート俺いいから、いらない」「はあ? いらないってどうこいつことよー?」「言葉のまま」「アリア、やめとけ、あいつの顔はストレス発散するときの顔だ命令でもしてストレス溜めたら死ぬぞ」「よく分からんんだけど」「わからないほうが安全だ」

俺は、とりあえず飛び降りて、バスの車体にぶつかる前にベクトルを操作して着地する。あれ? 一辺死んで大嘘憑き使つたほうがよか

つたか？

アリアとキンジはパラシューートでバスの屋根に乗ったが、キンジは滑り落ちそうになる。で、アリアが切れる。バスの中に入ると、

「キンジ！ 拓哉！」

「よう、武藤。お前も運がねえな」

「なんで俺はこんなバスに乗っちゃったんだ？」

「見捨てたバチがあたつたんだろ」

「なんだそれ？」

「後で言う」

「嶺、キンジ、あれだ。あの子」

俺たちが武藤に言われた方向を向くと、

「大崎先輩！ 遠山先輩！ 助けてっ！」

「どうした？」

「何があつた？」

「け、ケータイがすり替わつてて、いきなり喋り出したんですね」

「ソクドラオトスト、バクハツシヤガリマス」

やつぱこのボーカロイド、あの、金髪口リ娘か、ツたく面倒なこと増やしやがつて。

『嶺、キンジ。状況は？』

「予想通り武偵殺しの仕業だ、そつちはどうなんだ」

『爆弾を見つけたわ、カジンスキーの型プラスチック爆弾『C0 m p o s i t i o n 4』、炸薬量は3500立法センチはあるわ』

キンジ「な、そんなのバスどころか電車も吹き飛ぶぞ！」

『やつてみ

あつ！』

「どうしたー？ あ、お前そつちに集中しとけ俺が何とかする

「どうしたー？ あ、お前そつちに集中しとけ俺が何とかする

『できるんでしょひね』

「樂勝樂勝」

UNIを載せたオープンカーがバスを追つている。

「みんな伏せろ！――！」

「その必要はねえな。俺が何とかするから」

「はあ、分かつたよ。好きにしろ」

一斉に発砲してくるが、ベクトルを操作して全部はじき返す。ついで、オープンカーと、ぶつ壊れかけたところで、直死の魔眼を発動させて、穴をめがけて、ナイフを投げると、バラバラとオープンカーごとぶつ壊れた。

「け！カスが」

「嶺先輩いい感じにぶつ壊れでますね～」

「あれ？ 未来もこのバスに乗つてたのか？」

「ええ、とりあえず乗つてたんですけどこんなことになるなんて」

「助けてやるよ。安心しな」

「はい――」

未来と会話していく、反対方向からもう一台来るのに遅れた。

「やべえ！ キンジ！――！」

「アリアー！ アリアー――」

キンジが叫んでいるやつちまつた。畜生あの時と一緒にじゃねえか！
！パンと銃声が起ころ

『私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目的に向かつて飛んで行く、だけ私は一発の銃弾』

レキの、いつもの魔法のような自己暗示のよつた言葉で、ギンッ！爆弾がはじかれた。そして、川に落ちて

ドウウウウッ！――！

爆弾が爆発し激しい水柱を上げた。

その後、武偵病院に入院したアリア俺は、今から見舞いで、守れなかつたことを謝りに行くところだ

「ふふ、レキの奴もう来てたのか」

レキよりと書いたカードと、白百合^{カサブランカ}が置いてあつた。あいつもい

とこあるじゃねえか

レキには謝つたらわたわたと慌てられて、そんなことしなくてもいいといわれた。俺は涙が出るほど悔しい事態だつたから、謝らないと気がすまなかつた正義の一族の末裔だからなのかもしれない。

そして、どうやって謝ろうかと考えていたらキンジが、悲しそうな顔をしながら病室を出て行き、俺は入れ違いで入っていく

「アリア、まずはすまなかつた。キンジがミスしたのも、全て俺の責任だ。」

「別にあんたが謝らなくても」

「いや、キンジは悪くない、何とかするといつておきながら何一つできなかつた俺が悪い」

「そう、だけどキンジもキンジよ！期待してたのに。現場に連れてけば、またあの時みたいに実力を見せてくれると思ったのに！武偵をやめるですって？！逃げるのもいい加減にしてほしいわ！？」

「それは違うアリア」

「じゃあなんなのよ！あたしには時間がないのよ！」

「時間はないのは分かつている。だが、あいつはあいつで重いものを背負つている。それを侮辱するような発言はやめてくれ。最後に、すまなかつた。」

それだけ言つと、俺は病室を出て行つた。病院の壁にこぶしを打ちつけながら。

Boy was the failure, advanced to begin the next stage of frustration in the chest. Person is unaware (失敗をした少年は、悔しさを胸に次の舞台へと進み始める。本人は知らないまま)

Failure of frustration 失敗悔しさ（後書き）

皆さんcaroooを今年は有難い「J」でございました。
来年もよろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6817z/>

緋弾のアリア～D家の最強の負完全

2011年12月31日20時46分発行